繪本三國妖婦傳

下編 二

へ13
2892
12

門へ 13
2892
12

昭和九年
八月三日
購求

繪本三國妖婦傳下編巻之二

目録

安倍泰親初禱城修玉藻前帝を拐去
泰親が書院白竹鈸へ使もる圖
清涼殿に泰親初禱墓目城修もる圖
玉藻前祈の檀に振く圖

玉藻前野干と化して老玄圖

泰親恩賞拭賜る圖

狐狸野の原に逃隠るを追ふ帝野干狩

八帝宗重の家臣青地幣拭拾ふ圖

宗重狐狸野に野干狩の圖

繪本三國妖婦傳下編卷之二

安倍泰親術祷を行ひて玉藻の前帝都を去る

播磨守安倍の泰親術祷を行ひて玉藻の前帝都を去る

休んでなくんと心を碎き不思議ゆゑ加茂明神の神勅を蒙り

あまたびやうして妻の菊姫に知を申姫く先関白忠實公の館へ

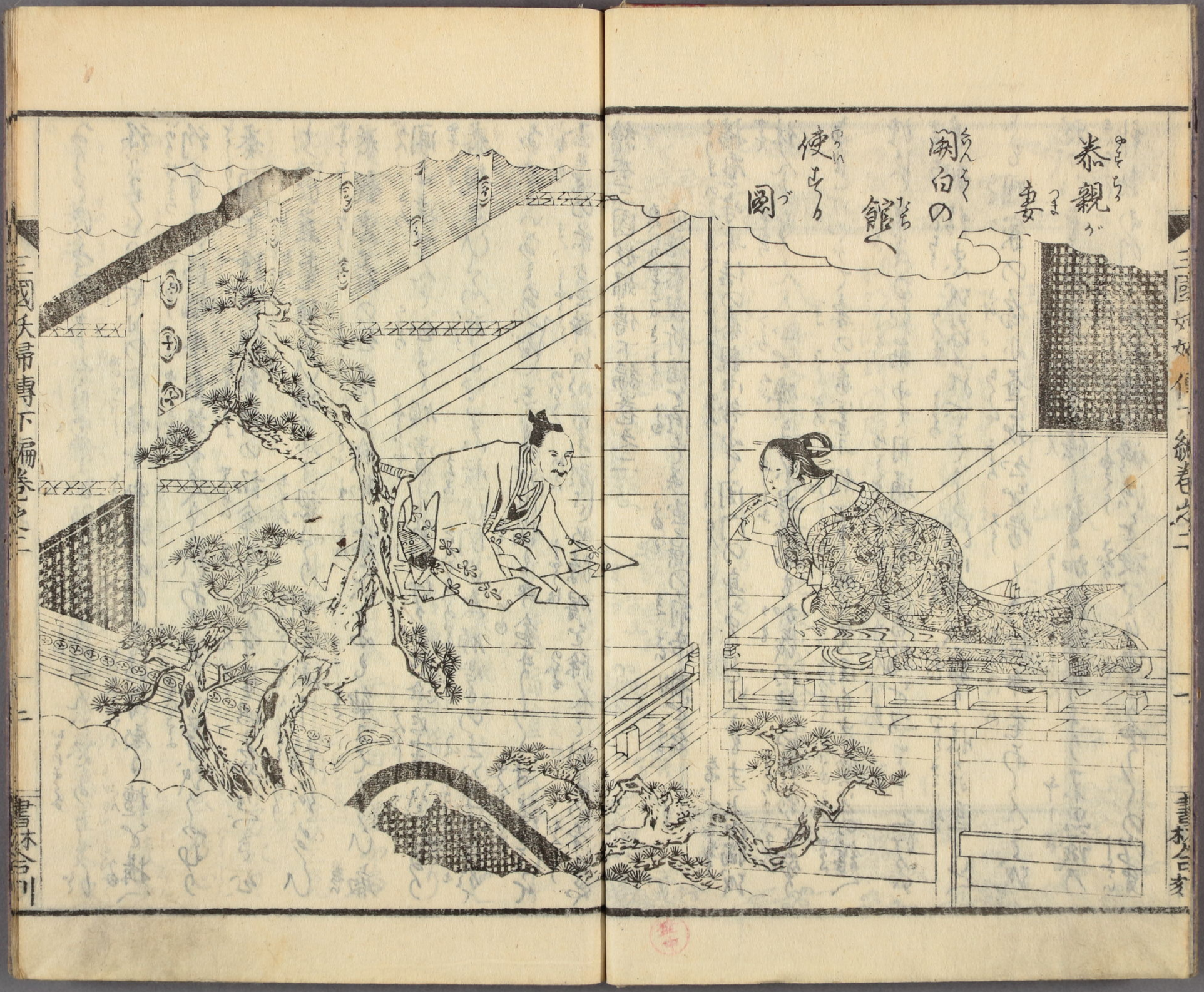
法長寺家の紀筋ゆえ因通じ色を書物をこゝろ

泰親結忠誠なれば不そうしで始終を生とい

ども國家の爲ゆゑ色を労し苦悩年金あるんを拭

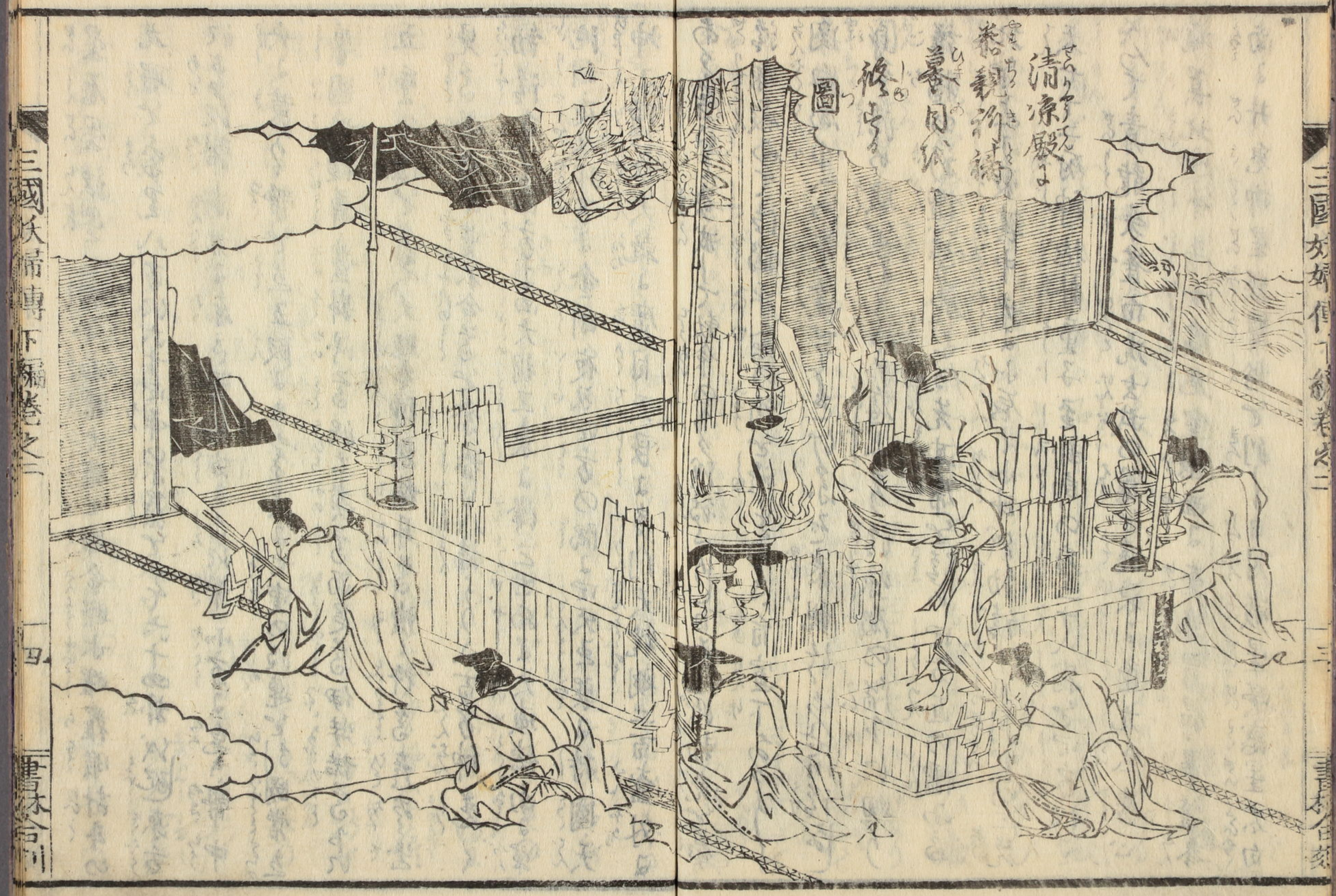
祈ひなる知事はる伝しなる加茂明神より不思議乃

神勅ありて出形祷の秘法を授つる事うるわしくの物語


恭親が妻
潮白の館
使ふる図

ありと法ぶるかゝ一門家よりおのゝ法を修せんいとまあらんに
祈るべき一七日の間情を動免あれて清涼殿の檀を構へ
祈をぶる悩平癒祈あるべきよしあるべき吟軍ばかりあり
奏聞を経べきの勅許の宣命下ぶべ本屋此ものやうにき
とゝに慈雲猶こゝ祈ぶよと恐ぶり関白殿下讃嘆あり
蘇親忠義の心底を我ものゝ家いかゝ敵
聞よ達せんと思ふ頃堂上のひけるふを法皇事ばかりけり
蘇親ひとびとの祈よりまゝ呼び関白殿頃堂のこゝ上上ふ方
あるどういかゝの心底志をゝ悩も平癒まゝ〳〵す忠をして
玉藻の前が正体城の白ふ殿さめ陳腐を除人をけゝの本屋や

あるべきと奏戒して勅命のりゝ日あゝ〳〵勅免を蒙
清涼殿ゆて法悩平癒の祈を修ぶべき宣下あるゝ
関白殿下めして達せゝをけるふを蘇親ものゝ清涼
身を清め服をあゝゝゝ庭上より清涼殿の階下に廻り
護持の祈檀ばりつけゝ先真席を清め四方面の檀ふ
北を上ふ東真中央ふ小辰と小卯紙勅諸〳〵日月星の三光
天七十二府神抱卦童子至卦郎の座二十八宿を四方にゝ
うて青龍朱雀白虎玄武の籠を建東ふ角亢氐房心
尾箕北ふ斗牛女虚危室壁西ふ奎婁胃昴畢觜参
南ふ井鬼柳星張翼軫を列〳〵日月歳星熒惑星太白


清涼殿よ
暮れ方
圖

星辰星法星七曜又本曜火曜土曜金曜水曜羅睺計斗の
九曜を本星八方に六十二神の小纏をうて六十四卦配東方
に青き幣南方に赤き幣西方に白き幣小方に皂き幣中
央に黄なる幣を立五段より上に七重の注連を引國常立
尊國狭槌尊豊斟渟尊泥土煮尊面足尊伊弉諾尊下に
五重の檀をうゑ天照大神君稲耳尊瓊々杵尊彦火々出
見尊鸕鷀草葺不合尊を祭春日八幡宮八百万神悉く
勧請奉し四方に四大明王東に降三世西に大威徳南に軍
陀利夜叉北方に金剛夜叉中に天王製に持國天
坤に増長天乾に廣目天艮に多聞天焼明二百盞外に

一神鏡の大燈を立供物を備へ法律の仏羅を読ませ八月
保安元庚子年九月八日祈禱の用爾安倍恭親吉服清衣
冠帯して檀に昇る青白黒の浄衣を着せ一その
又人黄色の幣に白色なる幣に赤色なる幣に恭親が懸る
懸ひ外に人々に方々に檀の中央に黄なる幣に
懸小立垂自身引に白き幣を取曼荼羅の弓矢を右に
祈をうけて七日に公卿殿上人かりくに御供の人
日よりうけて玉藻の前を結縛し[illegible]を関白殿下にうけて
奏聞を強ひけるに其旨叡聞に達せらるるまでに玉藻
の氣を百て賜が病平癒の祈として恭親檀をうけ七日の

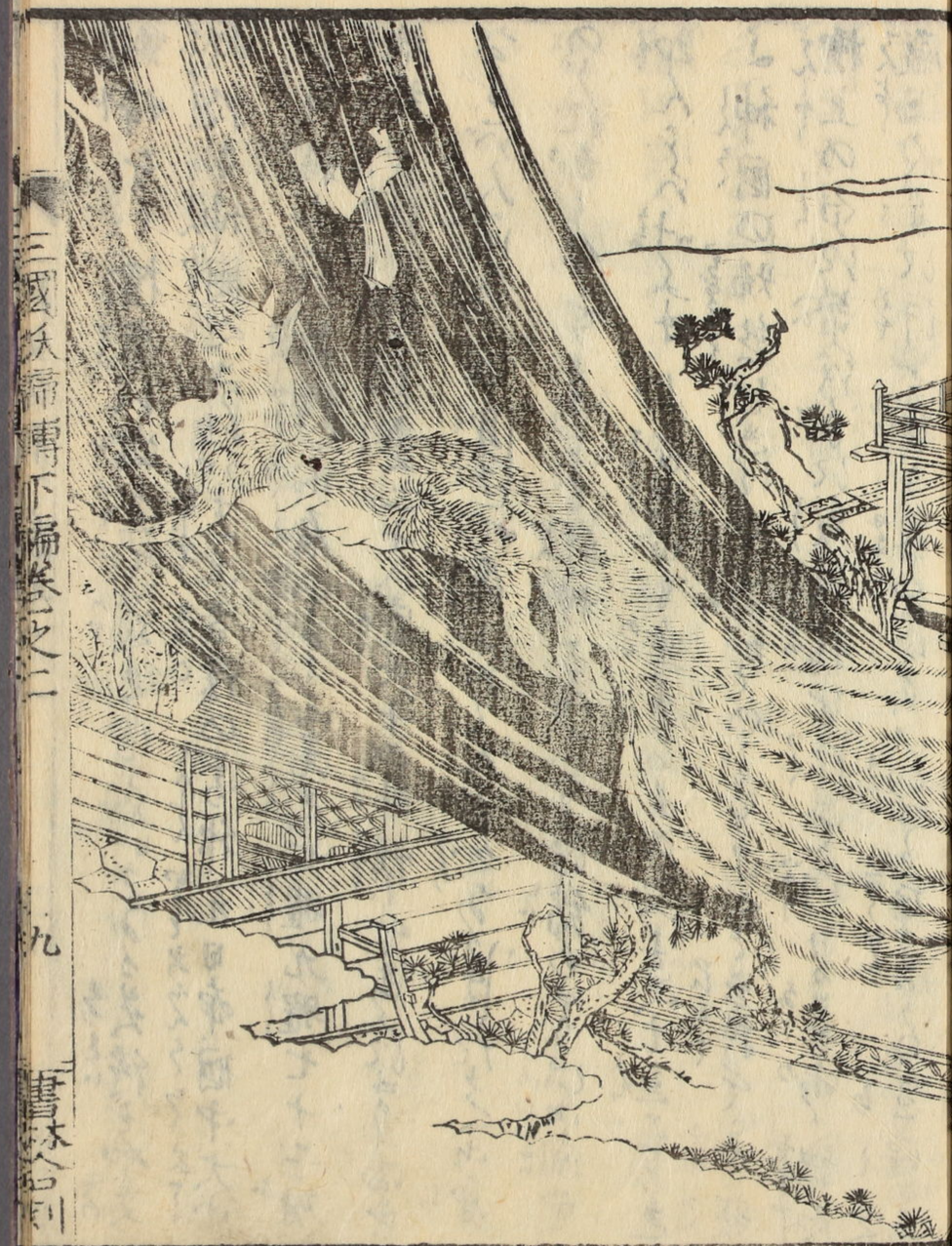
丹精を抽ん出て、ながく落飾の日あるまじ。汝を捨て、涙を人と
を頼の服はかりより沙て其鮮を[illegible]とし勅使あるまじ玉顔の
前墨衣なく此清を命じつ服をあらくあの女嬬まもづれ
清涼殿まあ西こ[illegible]を紅梅と唐綾縮緬源の五襲
紫の袴踏ならけ[illegible]香雲裾よ傾り玉の冠をいさぎよ
ちらりと出くるを天女の素隙まじやと[illegible]を一さび咲び
臙を傾くいひ傾城傾国の[illegible]妃あるとそ[illegible]を
うつくしの人をあるを玉藻の花を[illegible]を[illegible]
おぐの春親に對して[illegible]が[illegible]を撫て[illegible]
平金の[illegible]を隔んとの呪詛をくるべし

よくも帝を[illegible]清涼殿[illegible]と詞けるを恭敬い
何事ぞ玄葉を[illegible]公卿をゆるく
処ふて主人を[illegible]の一言に對せずんば[illegible]
[illegible]思まんと蓋けるを東君を[illegible]
平金沢[illegible]たとへ[illegible]を呪詛
葉が[illegible]の身の[illegible]
[illegible]の嬪妃[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]

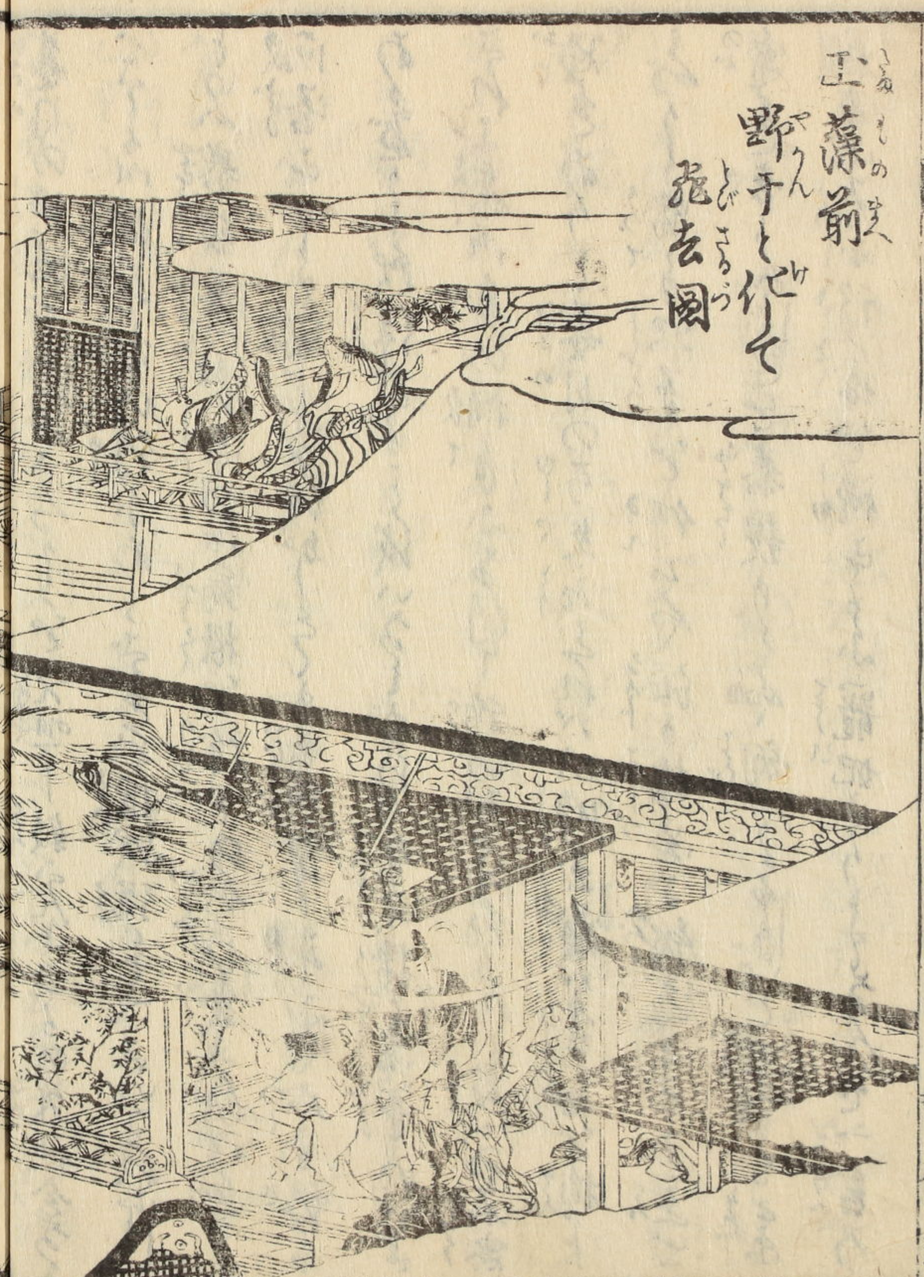
玉藻前
祈の儘よ
新く
書林

和尊をうけ汝が家の所絶滅招んこの不便さに異見を加へる
なり早く此術を止よと怒のていさへけるふそ蓑釈又申ける
ハ今日潘貴の術も尽ぬ早まべ弾せ〜めん為奏せ〜君寵
重く蓑る出身帝の出悩を祈る檀を止て妨らる〜ことをいぶ
かしけまあとに出身呪咒命をまびさに祈らん心
うて寵情も貞妃も移しべ鈴をゐんぞや巧言をりけて
故障をうんとも誠よ東が乞と一つふハ論じがし君の法為よ
ゐに業よい東家をも命をもかうべき後悔なんを和なそ
此祈を始んやは出身の業よ東が家所縁なくしのんと思ま
ゐ免も角も公よまうせ弁らいまるといへ玉藻の義汝

蓑月の修法をりつてこづうを呪咒一数さんとさるの外他念の
ごとくれ悩平金の祈ふあるざまべ檀弾そべきいうれはし
とい蓑親蓑月い帝の出病根を除くの行ひ業よび出身と
問答とるとも同じ多紙かうとも云曲らず弁ふて云る所
あるべ所弾とるとい紙いるのでは是又祈を治事にいる
されよ東出身の相を ふ為て祈のおそおりんい君への不忠
為きありと蓑月の弓矢ふれば時玉藻ハ色を揚ド
こづうく勝を沢弟を何ぞや汝が指図よ所べきかう立て
通まこうんと也を蓑親りうや親ハ申ほどと思ども東
君の出為ふ祈を修とるふ寵妃さうともゐんを一言乃



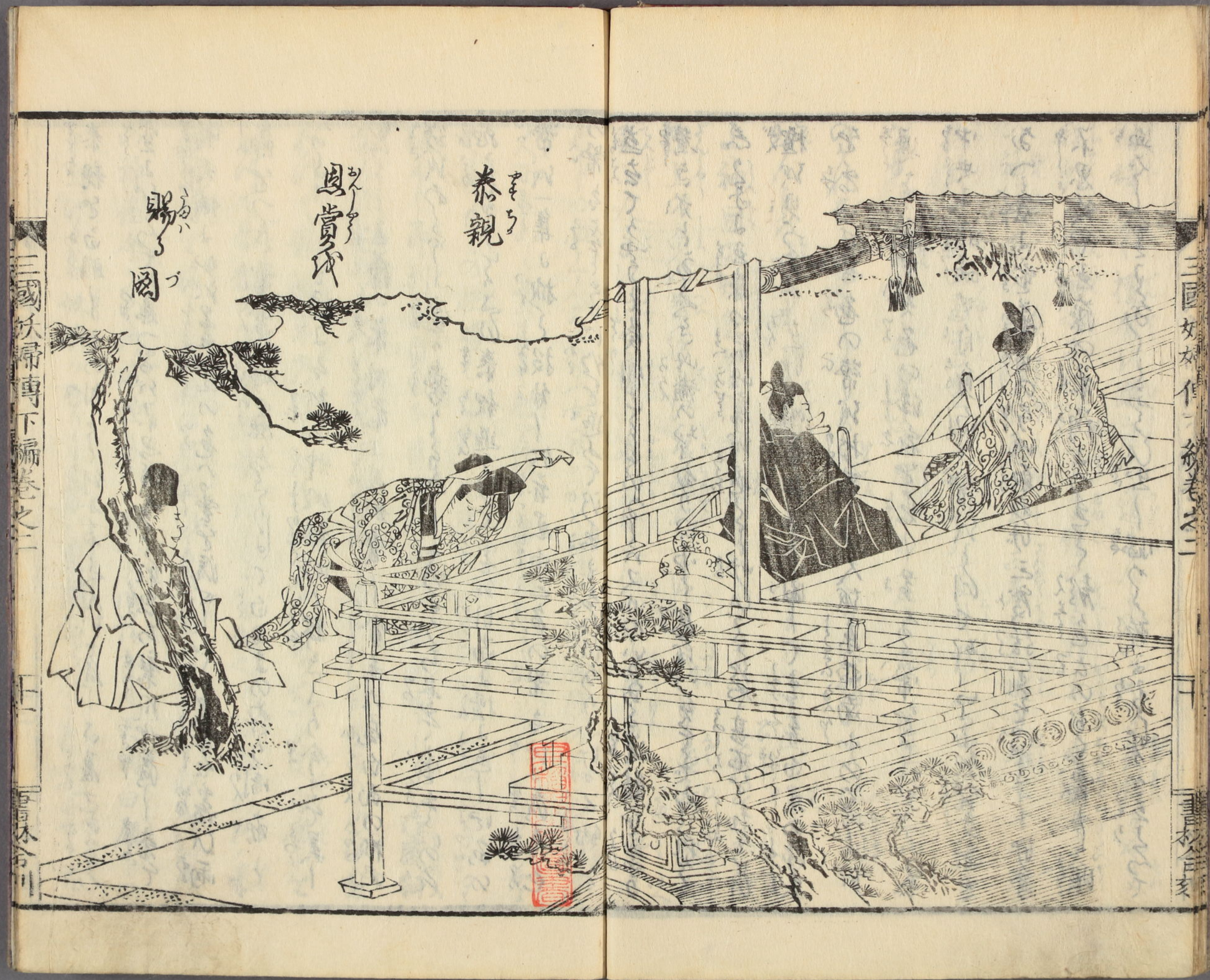
書林金花堂



書林金花堂

謝辭なく檀席に端坐して道まことにいうべき美徳をもて我邦を神國とされば主上当優の為神元日本國中大小の神祇ちに勅願小原小本三光天七曜九曜七十二府抱卦重卦の吉凶童二十八宿六十四卦猶ほ詳しく問ふ人間なるを身はて席よりあんを出たとえ身のがれ去らんとせしも乾坤ちに縮めりしれ間を知んとへ叶ふまじ柄ふも道まことにいづまこへも立去らるべ

き神國の炯然をもせんなかくのごとくやくと云捨て春親檀上の白紙帯紙をひろげて筆を振て祈ける筆跡の語ん厳上人なれば汗を拭り春親ちりいはる度言うの玉藻のあ立去てうつと養用ちにのうへ又りやいうある逆鱗を帯り危き身とあるべき此論のかりいうふ息をつきそをわれるあるふる玉藻の筆此席迫くけひどくなるや甚正を動もせば檀紙見つめて立ひる時春親さ一圖てまき白紙の浄衣を広ふる色基色の帯紙打せ一ぽ人紙東西南北のそ一ぽ退ち立せ黄色の浄衣を着一黄なる帯をのせ一人中央に踊踊せ自身白き帯紙をのへ髪に重墨月の弓紙取あげ三度弦をを鳴ら一ひ弓不思議や玉藻の筆祈よつまこく彩色古のごく変じ眼血ぐ一まこ一ふ出一ぽ稀よこひが立よんて


恭親
賞式
踊る図
三國妖婦傳下編卷之二
三國妖婦傳下編卷之二

奉親を白眼しその用ゐ何ぞくんおとなしさ展己の為の空よむらんて一息つきバ黒紙なるれ忽ち驚風吹落して晴天紙よりかに墨色空の色ハ墨を流せしごく黒雲ひ雨の様をつくる雷電霹靂きりはて白日まのあたり剛赤と

なるさんぐも槌よりも数の蛇の赫ゆと輝きくり今ぞ美しかりつゝ玉藻の前同様よ甚形変じ金毛九尾白面の狐乃

変化あるいハ雲の勢うるうち変て虚空にのゞ

弧を画るさるさび奉親退うけく雲紙目出る槌よりて白色の

帯紙一集よ投げ投げ投げて赤黒白三色の帯を地よ落き色

の帯を雲とうりに沿を返ゆて沿来もちんびありふげる公卿を

さゞめ殿上人を合ふ女官おのくあれを見て玉藻の前こそ狐

人かをあるざりと肝を消し身の毛もよだち斗ゝたちまち変

さまをとの快晴しなれバ西陽ぞ申の刻ふるぶるけ

ひす部剖朝白殿下参内あまぐ歳間ましくて法威解

あるび主上も大に驚うせのふ子ぎや法幡尼より出平金

ありて龍躰平生のごく法験よりのふを関白殿下を

もりて奉親が忠節歳感深うぶる処と詔命あれバ奉

親面目を施し去ぬの員紙ひくき尼小臣が切ゝあるび如義

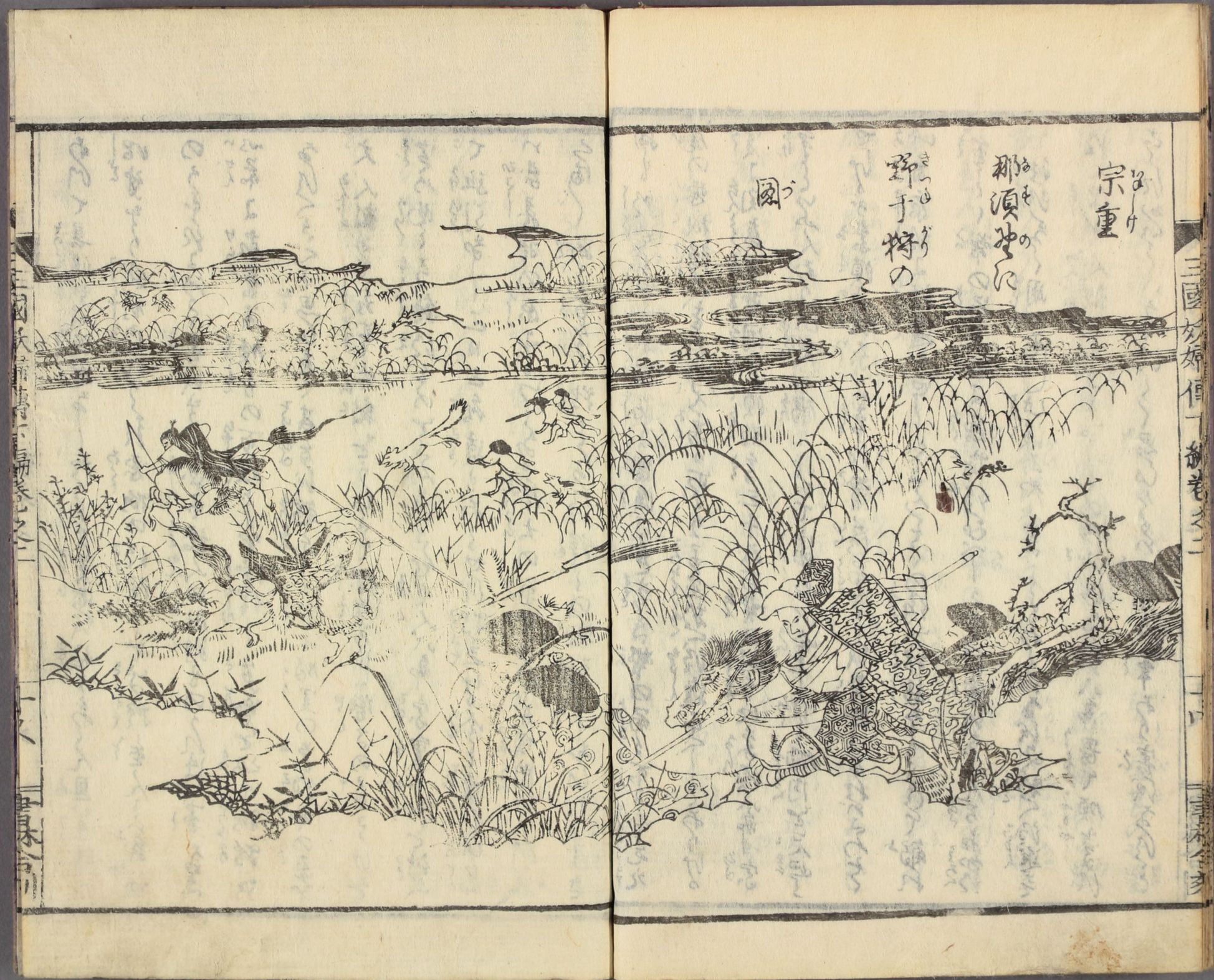
の神徳今上の御威徳よる百と出法命一又関白殿下一

上ひるる妖槌が去くし方ハ東国あくんと高くし光

八郎宗重の家臣青江
幣を拾ふ図

に沿を過て通りしまと紀帯を東方角亢氐房心尾箕の七星
引る方位なるばかの帯の蔭る所は概て陽の地なり。悪
概生あるうちを吳なる害に為をぐきあれば甚地の諸人悩き
さきんよ〳〵東国方に鎮あり帯のあるを本として沿進をも
廣に為る命ぜらるべきとこに於て甚長東国節の王司
頭を〳〵鎮流さる程不日に恭親愚蒙に成ぶ〳〵のり蒙れをあ
けるも是勅使に成ぶ忠節義信の徒あれば天子をあ
加義大明神の擁護に成ぶり牧場をとゝひ主上の悩和合を
さゝえをもゝ〳〵を義代朱鳳の名が〳〵に海を家に成ぶ
概京須野の原に逗隠を京須八郎野千特

却も好逸の軍東国節の鎮流さる帯の蔭り不日合戦九
尾の悪概陽ぐまれば又事の所りを進ぶ沿進をぐ〳〵とありける
賞に関東下総国京須郡の三千人百貫の所を以京須八郎宗
家といふ人あり此度い鎮に法いて家臣に命じ日〳〵頻内を人四
せけるが京須野の原に帯蔭り紅見卯あれば方々
此旨京都に沿進をゝ〳〵処さんくの内へ神妙なりとて鎮れ
〳〵帯の蔭に京に悪物行むべ〳〵に害ばるさん方お鎮
沙汰ぶ〳〵用心をゝ此後ゆやしきもわ〳〵べるに成ぶ物く沿進を
ぼしよく人数を下さるべきとの内沿あれば八郎畏て頻畏に
さるにあらくハ命法〳〵思ひくの傾き事あり害成るべく


宗重
那須野の
野干狩の
図

あつて甚後悔し沒遊あり　たりとも先帝紙條をあらん且六系統の
沼地より我が門にうれ惡物の經陽をも拾至人うら氏繼
のうるれよ仙く書ばまさべ出も諸人の批判ものうれは事なる
以第ヨ蔵書美傾名の百姓どを信信し多響を以て物物紙
をひくさと思ひ立て甚負ば觸示し　言ナ將軍の家頂神の亟て
大人數みて永世古敵をうもて　鬱空なし　鬱るのるうけを
宮内卿ら鎖ひるものをうぶさせ人八命　家重小紙を信へ
て孤引部　二日三夜遠もあらせば物立ける今と遠ひ命
い武義神の原ふもつる廣大の系要るれども頂門ふ門へ
ら面ぐ弱る言ら物るうれば信ら の勅新日ひあひ　き

蔓月のあをとも鯛まて　合毛九尾白面の狐ちさ　ひ人家ら
をうつて其信さう亟けふ沼ちく右の惡狐の本名ふや狐
ふく出て人民をうやきあるひを人ばとうこ　い入る性
還の御城牛どがいろ　の他をあして人のうぶ　ひ大勇
あ　ば怖　なんどいふ　うと生へける

繪本三國妖婦傳下編卷之二終